



黎明期のオリエンテーリングの様子。

10000人を超える参加者を得た大会があるほどの盛況ぶりだったが、その反面畑の踏み荒らしやゴミなどの「公害」問題も発生した。普及と社会とのコンフリクトは常に裏腹の関係にある。

オリエンテーリング大会を開催するにあたっては、様々なリスクがあるが、まず思い浮かべるのは参加者が自然の中で晒されるリスクだろう。そのようなリスクを取り除き、参加者の安全を守ることは主催者の重要な義務である。

だが、大会開催のリスクはそれだけに留まらない。基本的には他人の土地を利用して行われているオリエンテーリング大会は、第三者との関係が大きなリスク要因になる。

思い起こしてみれば、オリエンテーリングが大衆スポーツとして爆発的に普及した1970年代には、パーマネントコース利用者のゴミ放置や、他人の土地を無断で通過するといった行為は跡を絶たなかった。私自身、近郊で行われた大会で「オリエンテーリングの人、帰ってください」と、道の通行を止められたこともある。オリエンテーリング公害という言葉さえあったのだ。

その後、地元に対する渉外の重要性はもとより、オリエンテーリング愛好者に対する啓発も行われた。今、ほとんどの大会は地元との良好な関係の中で実施されている。ハイカーとの軋轢によって、山道ではほとんど個人的にしか乗ることができなくなってしまったマウンテンバイクに比較すれば、

オリエンテーリングはまだ幸いだったのかもしれない。

もちろん、その後も大会で地元や自然保護団体からトレインの利用を一部不承認されたり、中止を勧告されることもあった。それらも、裏を返せば関連団体とのコミュニケーションが取れていた証拠だとも言える。

他者の同意があって初めて実施できるオリエンテーリングにおいて、関連する他者とのコミュニケーションの断絶を感じさせる出来事が、立て続けに起こっている。

その最たるものが、昨年12月の東日本大会だ。前号でも報告されているように、同大会は、「南足柄の山林に入ること許されない」旨を記した脅迫状によって中止を余儀なくされた。南足柄での前回大会時にトラブルがあったという話は聞かないから、常識的な意味では、主催者に落ち度があったとは思えないが、それでも山林でのオリエンテーリング実施に対して拒否的態度を持ち得る存在があることを示している。

2年前の大阪でのインカレロングでも、当日のスタート地点で地元住民の抗議を受け、大会が中止となった。こ

の1月には、京都で、やはり地元住民との渉外が不十分だったため、直前になって大会が中止されるという事態が起こっている。

偶然かもしれないが、これだけ頻発する大会中止の背後に何があるかを探り、また可能な限り対応策を講じていくリスクマネジメントが必要である。

社会全体の寛容さがなくなっていることが感じられる今、これまで以上に地元や関係団体との密接なコミュニケーションを心がける必要があるだろう。

競技中の競技者行動についても、より慎重な態度が必要だ。昨年度群馬で開催された全日本スプリントでは、競技者が蛍の生息する湿地の立ち入り禁止を無視（あるいは気づかず）に通過しそうになり、それを防ぐためにスタッフが張ったテープにより競技不成立が発生するという事態が起きている。

その際、張ったテープを無視して通過した競技者もいたという。さらに、今年2月のES関東の公園でのスプリント大会では、公園の一般利用者に対して、怒号とも言える声を発した競技者がいたという未確認ながらの情報もある。いずれも、公共の場を借りてオリエンテーリングを実施しているという意識が欠如した行為と言えるだろう。

このような行為が増えれば、公共の場でのオリエンテーリングを開催することはできなくなってしまう。

組織、そして各オリエンテーリング愛好者の両面から、改めてオリエンテーリングが行われている場所が公共の場所であること、そこでは競技規則以前に社会的常識を踏まえた行動が求められることを共通認識としていきたい。

(村越 真)